2　子宮頸部腫瘍における Human Papillomavirus（HPV）検査の意義

児玉　省二・小島　由美・笹川　基
本間　滋
県立がんセンター新潟病院産婦人科

【目的】子宮頸部の細胞診に HPV 試験を併用し，診断的意義を明らかにすること．

【方法】子宮頸部のがん検診希望者，二次検診紹介者，異形成で定期的な観察者を対象とした．HPV・DNA 検査は，ハイブリッドキャプチャー法（中-高リスク型 13 種類）で検索した．

【成績】HPV 検査陽性は 1351 例中 27.9 %で，その内訳はがん検診希望者 812 例中 5.5 %，二次検診紹介者 297 例中 73.7 %，異形成観察者 242 例中 46.5 %であった．HPV 陰性 974 例のうち，異形成 33 例，上皮内癌 6 例，浸潤癌 7 例（腺癌 5 例，スリガラス細胞癌 1 例，扁平上皮癌 1 例）であった．診断精度は，HPV 検査の感度 85.4 %，特異度 89.7 %，陽性反応適中度 71.6 %で，細胞診はそれぞれ 88.8 %，90.7 %，74.3 %であった．ただし，HPV 検査は施行全例に対し，細胞診検査はスクリーニングされた症例が含まれている．

【結論】子宮頸部腫瘍の HPV 検査は，頸管粘液の多い腺癌や特殊組織型の場合に限界を示した．

3　当院における抗 MRSA 薬の使用状況 —TDM（Therapeutic Drug Monitoring）と適正使用について—

張　仁美・手塚　貴文・茂呂　寛
田邊　嘉也・田村　隆*
青木　寿也**・下条　文武
新潟大学大学院医歯学総合研究科
臨床感染制御学分野（第二内科）
新潟大学医歯学総合病院薬剤部*
同　検査部**

【背景・目的】MRSA は院内感染の主要な原因菌で今後も増加が懸念され，診断，治療の重要性が高まっている．また抗 MRSA 薬の使用に際して，有効性，安全性を確保するために TDM が重要であるとされている．今回我々は，当院での抗 MRSA 薬の使用状況と TDM の実施状況を中心に調査し，抗 MRSA 薬の適正使用の介入に向けた方向性について検討を行った．

【方法】2007 年から 2008 年 3 月で，当院入院中に抗 MRSA 薬（TEIC, VCM, ABK, LZD）を 3 日間以上静脈内投与された 20 歳以上の症例を対象とし，抗 MRSA 薬の使用状況と TDM 実施状況を中心に retrospective に調査した．

【結果・考察】抗 MRSA 薬の使用例は重複例を含め 476 例で，TEIC の使用例が最も多く，次いで VCM 使用例を多く認めた．TDM 実施率は，TEIC 42.2 %，VCM 62.8 %，ABK 13.0 %と全体的に低い結果であった．今後当院では，抗 MRSA 薬を完全届け出制とすることを検討している．全症例に対し，投与前の TDM 解析ソフトを用いた初期投与量，維持量の設定，TDM 実施の推進，TDM 結果の迅速なフィードバック，その後の投与設計の調整を行うことで抗 MRSA 薬の適正使用が実現可能となると考えられた．

4　口腔カンジダ症におけるイトラコナゾール内用液の使用効果

小根山隆浩・田中　彰・又賀　泉*
日本歯科大学新潟病院口腔外科
日本歯科大学新潟生命歯学部口腔外科学第 2 講座*

【目的】抗真菌薬イトラコナゾール 1 %内用液（以下内用液）の使用効果について報告した．

【対象および方法】口腔カンジダ症が疑われた 53 例について簡易培養検査を行い，24 例（45.3 %）にカンジダ菌が検出され，24 例中 19 例に内用液 15 例とカプセル 7 例（重複 3 例）と，カンジダ未検出であった 29 例中 16 例に内用液 9 例，カプセル 7 例を使用した．

【結果】臨床的治療効果ではカンジダ菌が検出された 19 例のうち内用液投与 15 例で有効率 80.0 %，カプセル投与 7 例で有効率 57.1 %であった．カンジダ未検出で内用液投与 9 例では有効率 33.3 %，カプセル投与 7 例では有効率 28.6 %であった．有害事象では内用液投与例で軟便 3 例，便